



物語文①心情の読み取り

佐藤多佳子『第二音楽室』より「デュエット」

大隅先生の国語講座/第一回

今回のねらい

大隅講座第一回では、物語文の読解の基本となる「心情の読み取り」を2回にわたって強化していきます。今回扱う問題では、主人公の気持ちが目に見える形でどんどん変化していくので、その変化を捉えながらしっかりと読んでいきましょう。

中学の音楽の葛城先生は、元テノール歌手で、ドイツに住んでいたこともあり、白髪頭をオカッパにしてて、やたらと丁寧な言葉遣いでしゃべる。ヘンな先生だなあと思っていたら、ほんとにヘンなことを言い出した。再来週の実技テストを男女のペアで歌えつてのはどうよ？それも出席番号順とかじゃないのよ。

「せっかく男女で歌うのですから、好きな方と約束するといいいです。これぞと思う方に申し込みをしてください」

もう音楽室は悲鳴の嵐。

「ただし、男性は女性の申し込みを断ったらいけませんよ。三人に申し込まれたら三回歌うようにね」

「あぶれたヤツはどうなるんですか？」

こう聞いたのが、いかにもあぶれそうな柔道部の重量級の工藤寛だから笑えたけど。

「その場合は、あぶれた皆さんで大合唱しましょう。良いお点はあげられませんかね」

冗談！あぶれ者の大合唱なんてそんなみつともないことさせられたら、次の日から顔をあげて廊下を歩けないよ。クラスで付き合ってる彼氏がいたり、気安く一緒にやろうって声かけられる男子の友達がいればいいけどさ、いないもんね。そんな気のきいた子ばかりじゃないんだよ。

その日から、話題と言えば音楽テストのことばかり。ウチらのグループは、彼氏持ちが一人いて、アヤは同じ体操部の吉田に声かけるって言うってたけど、サッチとリエと私はまるでアテがなし。

「加瀬くんのことについてちやおうかな」

ってリエがぼそつと言った。バスケット部の加瀬はよくモテる男で、クラス一の美女の磯貝をゲットして嫌味なほど完璧なペアを作っていたけど、他にも二人の女の子から申し込まれてハーレム状態になりつつある。

「ボランテアで工藤くんに行こうかな」

サッチもぼそつと言った。

「どっちがボランテアなんだよ」

と突っ込んでみたけど、二人とも自分から申し込むつもりらしくて、私はあせった。

「美緒はどうするの？」

いきなりサツチにずばりと聞かれて、私はうめいた。もし、自分から動かなければならないのなら、彼しかない——という人がいた。好きとかいうんじゃないけど、気になる子なんだ。軟式テニス部の三野田司。背が低くて痩せていて、地味なタイプだけど、声がキレイなんだよね、ボーイ・ソプラノで。一学期の歌のテストで、みんなが恥ずかしがったり緊張したりする中、キレイな声を張り上げて堂々と歌っていた。ほんとは楽しそうに。後から、「歌よかったよ」って声かけたら、急に恥ずかしそうな顔になって「よくないって。ガキの声で」って笑っていた。

どうしても男子とデュエットしないといけないなら、三野田がいいな。でも、あいつ、好きなコいるって噂なんだよね。私と同じ書道部の藤川さん。すらっとした物静かな美人で三野田よりだいぶ背が高い。よく見とれてるの、知ってるんだ。藤川さんはまだペアが決まっていなみたいだから、三野田は思い切って申し込むかもしれない。邪魔できないよね。

なんだか急に三野田と藤川さんのことばかり気になってしまって、休み時間なんか、いつも二人がどこにいたか探して。ペアはほとんどん決まっている。クラス一おとなしい小川香がクラス一うるさい金沢尚人に申し込んだり、山口宏樹がついでに恋の告白もして林麻美とカップルになったり。リエは加瀬グループに参加。サツチはまだ工藤を捕まえていない。

部活で藤川さんと隣の机になった時、聞いてみた。音楽テストどうする？ って。

「私、あぶれると思う」

藤川さんは生真面目にそんなことを言う。

「私もー」

大声で同意すると、顔を見合わせて爆笑した。藤川さんて、こんなゲラゲラ笑う人なんだ。部活が一緒でもなんとなく近寄りがたくてあんまり口きいたこともないんだけど。三野田のことをしゃべろうかと思ってたけど、なんて言ったらいいかわかんない。

「もったいない。ビジンさんなのに」

代わりにそんなことを言うと、

「美緒のほうじゃべりやすいよ」

と藤川さんは言うのだ。

「私は、ダメだなあ」

「ダメなんて言うなあ！」

背中をドシンと叩くと、藤川さんは涼しい顔立ちでニッコリして、その目が少しだけ淋しくて、私はなんか胸がきゅんとした。三野田はきつと彼女のこんなところが好きなんだなって思ってた。

男子を待ち伏せするって意外とむずかしくて、三野田をやっと捕まえたのがトイレの前で、何？　って聞かれて、こんなところで言いたくないや。廊下のはしっこまで引っ張って行って、音楽テストのことを尋ねた。まだ決まってるって答えるので、思い切って言った。

「あのさあ、三野田さ、藤川さんに申し込みしてみない？　あのコもまだ決まってるなくて、自分から声かけたりできないみたいだし、もしよかつたらさ……」

言いながら、すごくへんなことをしてるって思った。お見合いの世話するおせっかいババアみたいだよ。

「なんでよ？」

三野田は妙にクールな目をしてる。

「や、だから、三野田は藤川さんのこと……」

私は言いかけて絶句して赤面した。何をやっているのだ、おまえ——
広谷美緒。

「だから、なんで広谷がそんなこと俺に言いにくるのさ？」

昨日の部活の時に見た藤川さんの目が……なんて説明できないよ。困りきって黙っていると、三野田は聞いてきた。

「で、広谷の相手は？」

私は両手でバツテンを作ってみせた。

「おまえ、人の世話、焼いてる場合？」

呆れた声で三野田に言われて、私は力なくハハハと笑った。恥ずかしくて死にたい。

「どうよ？　俺」

三野田は自分の鼻を指差して尋ねた。

「広谷、俺と歌わね？」

「ええー？」

力一杯叫んでしまい、三野田はショックを受けたように廊下の床へタリこんだ。

「だって、私のこと好きじゃないでしょ？」

普通は聞けないような質問をぶつけると、

「これは、そういうことじゃないでしょ？」

真面目な顔で見上げて答える。私は自分を馬鹿だと思っただけ忘れて、三野田って意外と渋くてカッコイイと思った。

「広谷、前に俺の歌、誉めてくれたじゃん」

三野田は座ったままで言った。

「あれ、けっこう嬉しかった」

「うん」

「やろうよ」

「……うん」

ペアが成立してしまった。どうしよう？

こうなることを望んでいたのに、いや、だからこそ余計に自分が卑怯者みたいな気がした。

葛城先生からノートを預かっている加瀬のところにはペアを組んだことを二人で言いに行くと、すぐにクラス中に知れてしまった。どっちが申し込んだかというのをみんなに聞かれて、直接は三野田だけど元々は私がというおかしな展開をどっちとも言えなくて、「成り行きで」とモゴモゴやっていると、やっぱり微妙に自己嫌悪を感じるのだった。

「すごい、すごい、美緒」

と藤川さんはなぜか誉めてくれて、本当に後ろめたくて、

「カップルとかじゃないんだよ」

と言いわけると、

「関係ないよ」

藤川さんも三野田のようにきっぱり言うのだった。

「私も頑張ろうかな」

藤川さん、好きな人いるの？ と聞きかけて、これはそういうことじゃないんだとあわててやめて、でも、馬鹿な私は、やっぱりとても気になるのだった。

「一緒に歌いたい人っている？」

質問を変えて聞くと、藤川さんは一瞬だけ迷ってから、

「工藤くん」とささやいた。え？ あのもつさりした柔道部の？ 人を人とも思わない言動が面白い奴だけど……。

「ボランティア？」

前にサッチが言っていたことを思い出して聞くと、藤川さんはきれいな眉をひそめた。

「何それ？ 素敵じゃない、工藤くん」

頭の中で二人を並べてみると、巨漢とノッポの美女は意外と似合うかもしれないなくて。

「行け！ フジカワツ」

破れかぶれで叫ぶと、藤川さんは胸に手をあてて、ドキドキするねとつぶやいた。

屋上は風が強かった。一月末の風だから、半端な寒さじゃない。私の制服のスカートはまくれあがり、三野田のネクタイも海草のように揺らぎ、髪が顔にぶつかって痛い。空は青い巨大な一枚板のようだった。

「さみい。バカさみい」

三野田は首を縮めた。

「腹の底から声出してあつたまろう」

放課後は部活で時間がないから昼休みに練習をしようと言って、三野田は私を引っ張ってきたのだ。がらんとした極寒の屋上。音楽室なんて行かないところが三野田らしいけど。

藤川さんが工藤に申し込んだことでクラスは大騒ぎになっていた。工藤がどんなに照れまくって喜んだか、冷やかされて赤面する藤川さんがどんなに可憐だったか、思い出すだけでもなんだか落ちつかなくなってくる。二人はカップルになったわけじゃないけど、やっぱり三野田はシヨックだろうな。後悔してるかもな。私なんかと組んでしまっただけさ。

大きく息を吸い込むと喉から胸までキンと痛むように苦しくなる。風と寒さに負けまいとして思い切り声を張り上げた。ガチャガチャのハイモニーだ。歌い終わる前に顔を見合わせて大笑いしてしまった。歌っても笑っても息が苦しい。でも、なんか楽しい。気分いい。すごく、いい。

「なんで上が下に引っ張られるのさあ」

文句をつけながら三野田はまだ笑っている。明るい顔だ。屈託のない笑顔だ。彼を見ていると、誰が誰を好きとか、申し込んだとか、どうでもよくなってくる。楽譜に二つのパートがあつて、二人の人間が声と心を合わせて歌うのだと素直にわかる。

三野田の声はやっぱキレイだ。風に溶けていくような透明な声だ。寒さにしなびないみずみずしい声だ。私はぜんぜん普通の声だけど、せめて大きく力強く張り上げようと頑張った。何回も繰り返し歌うと寒さも忘れた。喉はガラガラになつたけど。

課題曲は『翼をください』。一番うまいデュエットは、加瀬、磯貝の黄金コンビだった。アイドル加瀬は全部で四度登場して、その都度ブルーイングを浴びて、ニヤニヤしながら歌っていた。一番冷やかされたコンビは、工藤、藤川組だった。先生に怒られようがテストで零点を取ろうが動じたことのない工藤が緊張のあまり固まってるくに声も出ないのを、藤川さんが一生懸命励ますように合わせていたのは感動的だった。そして、そう、一番ウケたのは、私らのペアだったよ——たぶんね。

女の子二人のデュエットみたいだったね。下のパートなのに私より絶対に声の高い三野田ととにかくきれいにハモろうとして夢中になつて歌つたんだ。目の前のクラスメートもピアノを弾いてる先生もみんな忘れた。そこには、三野田と私の二つの声しかなかった。音楽室には屋上のような風がなく、二人の声は溶け合つて豊かにふくらみ、大きく響いた。いいハーモニーだったと思うよ。とにかく、すごい拍手をもらつた。びつくりしたよ。歓声が起きて、工藤が高らかに口笛を鳴らした。三野田は腕を突き上げてガッツポーズをした。やめてよ。テニスの試合じゃないんだから。私はそんなことできなかつたよ。歌い終わってから、急に身体が動かなくなるほどガチガチに緊張したから。

先生が最終的には全員を組み合わせってしまったので、結局あぶれた人はいなかった。ハッピーな人もつまんなかつた人もいたと思う。私は——よくわからない。すごく恥ずかしい思いもしたし、すごく嬉しいこともあつた。でも、一つだけ確かなのは、このメロデーが特別なものになつたってこと。デュエットの歌声をきつと一生忘れないな。私と三野

田の。藤川さんと工藤の。そして、クラスのみんなのそれぞれのデュエット。

問1 『「ボランテアで工藤くんに行こうかな」』とありますが、この時のサッチの気持ちとして、最も適切な答えを次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① あぶれそうな工藤くんがかわいそうだと感じたので、親切心で申し出ようという気持ち。
- ② あぶれそうな工藤くんに対して、自分もあぶれそうなので、焦って申し込もうという気持ち。
- ③ 周りからの評価が比較的に低い工藤くんに対して、本当は好意を持ってしているため、申し込もうという気持ち。
- ④ あぶれそうな工藤くんに対して、デュエットのペアも組めないことを馬鹿にしている気持ち。

問2 『「なんだか急ぐ捜してる。」』とありますが、美緒がなぜこのような心境になったのか、その理由として最も適切な答えを次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 三野田と藤川がペアになるのではないかと警戒しているから。
- ② 三野田と藤川に付き合って欲しいため、②人の間を持つ機会を探しているから。
- ③ 三野田の藤川への気持ちを考え、三野田がいつ藤川を誘うのか気にしているから。
- ④ 三野田は自分を誘うと思っているので、藤川が組む相手を心配しているから。

問3 『「三野田は〜と思って。」』とありますが、『「こんなとこ」』を表している一文を本文から探し出し、最初の5字を抜き出しなさい。

問4 『「すぐくへんなことをしてるって思った。」』とありますが、美緒のどのような行動が『「へん」』だと言っているのか。美緒の三野田に対する気持ちを考えながら、50文字以内で文章中の言葉を使って答えなさい。

問5 『こうなるこゝ気がした。』とありますが、なぜ『自分が卑怯者
みたいな気がした』のか。最も適切な答えを次の1〜4から1つ選んで
答えなさい。

- 1 三野田をデュエットを組むことを望んでいたところ、狙った通りに三野田から誘いを受けることができたから。
- 2 三野田が藤川に好意を抱いていることを知りながら、思いがけず三野田とデュエットを組むことになったから。
- 3 三野田が藤川とデュエットを組むことを阻止しようとして声をかけたところ、三野田から誘いを受けたから。
- 4 三野田と藤川が付き合うことを望んでいたが、三野田から告白させることに失敗してしまったから。

問6 『破れかぶれ』とありますが、『破れかぶれ』の意味として適切なものを次の1〜4から1つ選んで答えなさい。

- 1 どうにでもなれとやけになること。
- 2 晴れ晴れとした気持ちになること。
- 3 悲しみに暮れ、どうしようもなくなること。
- 4 自分で自分を傷つけること。

問7 『すごく恥ずかしい思いもしたし、すごく嬉しいこともあった。』とありますが、『すごく恥ずかしい思いもした』ことと、『すごく嬉しいこと』として、考えられることをそれぞれ2文字以内で本文中の言葉を使って答えなさい。

模範解答

問 1 2.

問 2 3.

問 3 背中をドシ

問 4 美緒が三野田とペアを組むことを望んでいながら、三野田に藤川と組むように勧めているということ。

問 5 2.

問 6 1.

問 7 恥ずかしいこと…ペアを組むことと恋愛を混同していたこと。
嬉しかったこと…三野田と気持ちよく歌えたこと。